

救われた目的(2)

2009.9.1(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ピリピ人への手紙 3章14節

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。

コリント人への手紙・第一 9章24節から27節

競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

エペソ人への手紙 6章12節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

先日、御代田で始まったテーマです。即ち『主の勝利を得るための戦い』、或いは『キリスト者の使命』についてです。

救われた目的とは何でしょうか。もちろん救われた目的は、いつか将来天国に行くためではないのです。今生きている間に主によって用いられることこそ、救われた目的です。

私たちの人生において、最も大切なことは「救い主」を持つことです。「救い」とは、得るものではありません。「救い主」を持つことです。「救い主」を体験的に知ることです。救いの神を知ることによって初めて、私たちはこの地上において、本当に満たされた生活を送ることができます。

満たされた人生を送るために、「永遠のいのち」「主なる神との平和」「罪の赦し」、即ちイエス様が私たちのことを心配し、導き、そして守ってくださるという確信が、生活の土台とならなければなりません。そして、私たちが死んだ後は、永遠にイエス様との交わり、つまり「栄光をともにすることになる」という確信。それこそが、最高の宝物です。永遠にイエス様とともにいる、という事実について考えると、主を礼拝せざるを得ません。

パウロは喜んでイエス様を紹介しました。それにより多くの人たちが、イエス様のもとに導かれ、救われました。パウロも当然喜んだことでしょう。けれど、パウロの目的は、いつまでも乳飲み子の世話をするのではなく、信じた者が「全き人」となることでした。

新約聖書の手紙がどうして書かれたかと言いますと、せっかく救われた人々がなかなか成長しなかったからです。パウロは、

エペソ人への手紙 4章13節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

と書いたのです。

イエス様を知ることは「恵み」です。けれど、私たちがイエス様のために用いられる器となり、イエス様を私たちの「主」として、また支配なさるお方として、体験的に知ることが大切です。

そして、聖書の中で、主の賞与について、勝利の冠について、いろいろなことを記しています。「永遠の勝利」の冠のために生きていくことは、考えられないほど大切です。

新約聖書の中には、この地上における普通の競走と、「信者の霊的、信仰的な戦い」が、私たちの信仰を励ますためのものとして考えられている、ということが分かります。

パウロは、何度も信じる者の戦いについて書いたのです。おもに三つの異なったギリシヤ・ローマ時代の競技について書いたのです。

これらの三つの競技について、聖書は次のようなものを描き挙げています。

第一番目。「競走」

第二番目。「拳闘」

第三番目。「戦い」

* 第一番目。多くの場合に「競走」について述べられています。

この「競走」は、私たちの目前にある主の目標を目ざしています。即ち私たちは、「イエス様において」召してくださる「神の賞与」を得ようと努めているのです。今司会の兄弟が読まれたピリピ書の中で、パウロは、繋がれているローマの刑務所の中で書いたのです。

ピリピ人への手紙 3章14節

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

彼はもう既に永遠のいのちを持っていました。罪の赦しも持っていました。神との平和も持っていました。彼は悩みながら喜ぶことができましたし、心配・不安からも解放されたのです。生ける希望も持っていました。しかし、それにしても、やはり信じる者の生活は決して楽なものではありません。一つの競走です。ですから、主の栄冠を得るために、

目標を目指して走るべきであると彼は書いたのです。

* 第二番目。「拳闘」

「拳闘」は、今読んでいただいた箇所、コリント第一の手紙 9 章でしたが、私たちの中にいる敵と戦うことを目標としています。パウロがはっきり言っているのは、信じる者として失格になる可能性や永遠のいのちを失うことはないけれど、主の備えられている褒美は得られない可能性がある、と。ですからパウロは、

コリント人への手紙・第一 9 章 27 節

私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

「自分自身が失格者になる・・・」、このことはあり得ることです。

* 第三番目。「格闘」

私たちの周囲にあったり、私たちの外にある闇の力との戦いを目指しています。

エペソ人への手紙 6 章 12 節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

「私たちの格闘は、血肉即ち人間に対するものではなく、悪霊に対する戦いである」と、絶えず毎日覚えるべきではないでしょうか。

このように、三種類の競技と比較することは、それらが非常によく似ているにもかかわらず、私たちキリスト者の戦いの三つの異なった精神的な方向を意味しています。

今日は、おもに「競走」について考えたいと思うのです。この「競走」が意味している最も大切な真理は、次のようなものでしょう。即ち、

- ・すべてのキリスト者は、目標に到達することができます。ですから主の力をもって御旨に従えば、私たちもまた、目標を得ることができるのです。
- ・すべてのキリスト者は、力の限りを尽くして走り、そして急がなければなりません。つまり、私たちもそうしなければなりません。
- ・すべてのキリスト者は、目標を常に意識しなければなりません。誰も枝葉のことに目を奪われて、目標から離れることは許されません。私たちもまた、的外れな生き方をしてはなりません。
- ・すべてのキリスト者は、ゴールインするまで走り抜かなければなりません。誰も途中で疲れてやめてしまうことは許されません。
- ・すべてのキリスト者は、休みなく前進しなければなりません。そして、立ち止まること

は許されません。

- ・すべてのキリスト者は、この障害物競走でつまづかないように、また、倒れないように注意しなければなりません。敵は私たちが倒そうとしますが、イエス様は私たちを守ることがおできになるお方です。
- ・すべてのキリスト者は、最高のものを得ようと欲しなければなりません。そして、いかなる場合にも低い目標で満足してはなりません。当然のこととして、私たちもそうしなければなりません。その時にだけ初めて、私たちの主イエス様の栄光の冠を得る恵みにあずかるようになるのです。

ペテロは、当時迫害され、憎まれ、悩んでいた兄弟姉妹に次のように書き送ったのです。

ペテロの手紙・第二 1章11節

このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。

パウロも、コリントにいる人々に、似ている言葉を書いたのです。

コリント人への手紙・第二 5章10節

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。

救われた者は、報いを受けるべきです。彼は、殉教の死を遂げる前、テモテ第二の手紙4章8節に、次のように書いたのです。非常に素晴らしい証しでもあります。

テモテへの手紙・第二 4章8節

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

「義の栄冠が...」、永遠のいのちだけではないのです。

私たちは、主の現われを、つまり「再臨」を慕っているかどうかの問題です。「イエス様はいつか来られる」と、救われた人々は皆、疑わずに信じています。しかし、それだけでは十分ではありません。「今日かもしれない。イエス様、早く来てください」という心構えを持たないなら、問題です。

コリントにいる人々に、パウロはまた書きました。

コリント人への手紙・第一 9章24節

競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。

救われた人々に書いた勧めの言葉です。

ピリピ人への手紙 3章14節

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目標として一心に走っているのです。

とパウロは書いたのです。

テモテへの手紙・第二 4章7節

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

とパウロは言うことができたのです。

またある時、エペソで責任を持っている兄弟姉妹を呼び、彼は次のように証しました。

使徒の働き 20章24節

「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

彼は、そのように書いただけでなく、本当に心からそう思ったのです。「私のいのちは少しも惜しいとは思いません」と。

ヘブル人への手紙 12章1節、2節を読んでみましょう。これも考えられないほど多くの人々の励ましの言葉になりました。

ヘブル人への手紙 12章1節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

この走ることは何であるかと言いますと、2節に書かれています。

ヘブル人への手紙 12章2節前半

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

走ることは、イエス様から目を離さないことです。

ヘブル人への手紙 12章2節後半

イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

今読みました聖書の箇所は、目標を意識していることと、上のものを求める心を指し示しているのではないかと思います。一人の人間にとって、その人間がいかなることを考えているか、いかなる目的を持っているかということこそ、決定的に大切なものです。この

ような内面的な態度、及び姿勢から、その人全体の外面的な行ないも決定されます。

イエス様は、私たちの罪を赦してくださり、永遠のいのちを与えてくださるだけでなく、私たちの人格そのものを新しいものに作り変えたいと思っておられます。考えかた、見かた、価値観を変えてくださいます。

このような「本当の意味の人間革命」、即ち、その人を作り変えるためには、次に述べることが大切となります。私たちの内面的な決断、心の考えや求める気持ちが「上にある」、即ち、永遠なるイエス様ご自身に向けられていることこそが大切なのです。

コロサイ書3章1節、2節を見ると、パウロは、コロサイ地方にいる既に救われた人々を励ますために書きました。

コロサイ人への手紙 3章1節、2節

こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、主が自ら啓示される泉、即ちイエス様を愛しています。
- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、自分のいのちの泉であられる主ご自身と、個人的に祈りの交わりを持っています。
- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、目まぐるしい生活の中にあっても、常に静かな祈りと平安の中にいることができます。
- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、時々祈るというのではなく、絶えず祈り、絶えず感謝しているのです。
- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、上にあるものを見上げることによって、主が私たちを心に留めて導いて下さるようにと願っています。
- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、この世においても誠実な、そして、良心的な行ないの模範者であり、そしてそれと同時に、主の栄光が明らかにされることを心から待ち望んでいる者です。
- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、この地上においても責任を果たしていますが、その本当の目的は、言うまでもなく天にあります。
- ・上にあるものを思う兄弟姉妹は、イエス様ご自身を愛し、イエス様のみことばである聖書をも愛する者にほかなりません。

そのような、主と主のみことばを愛する人の生活は、空しく意味のない日は一日もありません。そのような兄弟姉妹は、聖書を通して、イエス様が毎日自分に語りかけてくださることを求めています。聖書全体は崩されることのない岩であり、信仰といのちの動かない土台です。というのは、主のみことばの全体は、上にあるものを思う兄弟姉妹たちにと

って、約束と戒めであり、イエス様の賜物と使命であり、まことに生き生きとした力を与えるものであり、人生の正しい方向を指し示すものです。

上にあるものを思う心と、聖書を読む喜びとは、相い伴うものです。すべてのみことばは、天からの食べ物です。したがって、聖書を読むことをおろそかにしたり、みことばを聞くために集会に行かず、主にある交わりを持つことを怠る者は、結局、地上のことを思い、霊的に貧しく、この世に属し、上にあるものを思う召しを拒むようになってしまいます。

上にあるものを思わない兄弟姉妹は、競走を終わりまでやり通すことはできません。そのような兄弟姉妹は、本当の競走者がするように、目標を意識して上を目指して走る代わりに、右を見たり、左を見たり、結局は同じような状態に留まらざるを得なくなります。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、夜も昼もみことばを思います。みことばを喜ぶ者はいかに祝福されることであるか、詩篇の作者は、次のように書いたのです。

詩篇 1篇1節、2節

幸いなことよ。悪者のはかりごとには歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。

上にあるものを思う兄弟姉妹は、主のおきてのうちの奇しきことを見るようになります。

同じく詩篇の作者であるダビデは、その119篇で、一番長い詩篇ですが、みことばは、ダビデにとってすべてのすべてであったとはっきり言っています。

詩篇 119篇18節

私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。

また、大いなる獲物を獲た者のように、主のみことばを喜ぶようになります。

詩篇 119篇160節

みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至ります。

そして、162節です。

詩篇 119篇162節

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。

主のみことばを通して、新しい力が、上にあるものを思う兄弟姉妹の中に入ってくるのです。

上にあるものを思う兄弟姉妹の目は、上にあるものに向けられ、目前に置かれた目標に

向かって急ぎ、前進する競走者になるのです。この競走の最後には、「勝利」が待っています。この勝利は、イエス様の再臨が行なわれた時に明らかになります。

ペテロは当時の信じる者に、この事実について次のように書いたのです。ペテロ第一の手紙 1 章 1 3 節です。

ペテロの手紙・第一 1 章 1 3 節

ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。

心を引き締め、身を慎む兄弟姉妹は、絶えず目を覚まし、主を待ち望む兄弟姉妹です。心を引き締めとは、即ち、完全に、徹頭徹尾、主の恵みを信頼することを意味します。恵みとは、人間の行ないと正反対に、イエス様が私たちのためになして下さったことです。したがって、本当の競走者は、100パーセント主の恵みを信頼して走る者です。即ち、自分自身の力に頼らず、ただ「主が明らかにされる目標」だけを目指して走る兄弟姉妹です。

本当の競走者の目的とは何でしょう。ピリピ書 3 章 2 0 節、2 1 節。葬儀の時にもよく引用される箇所です。

ピリピ人への手紙 3 章 2 0 節、2 1 節

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

私たちはただ信じているだけではなくて、「待ち望んで」います。

私たちの思いは、絶えず目標を意識し、永遠なる一つの目標だけにすべてを集中していなければなりません。それとは反対に、目標が一つに定められていない場合には、主から与えられた力で、目前におかれた目標に向かって前進することはできません。

それは、パウロの証しが言っている通りです。

ピリピ人への手紙 3 章 1 4 節

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

パウロは、

・まず第一に、競走者の召しについて語っています。

その召しは、ただイエス様お一人だけであり、すべてのものはイエス様を通してなされます。もう一度、ピリピ人への手紙を見てみましょう。3 章 4 節からお読みいたします。

ピリピ人への手紙 3章4節から7節

ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きついのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。

・第二番目に、競走者の霊的な目標について、パウロはまた次のように述べています。

即ち、ただイエス様のために、行なわれるということです。

ピリピ人への手紙 3章8節、9節

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

彼は、イエス様の素晴らしさを見たとき、「イエス様だけ」と思うようになりました。

・第三に、競走者の努力と力について、パウロは語ったのです。

即ち、イエス様とともに上に召してくださる主の勝利を得ようと努めているということです。10節からです。

ピリピ人への手紙 3章10節から14節

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

・第四に、競走者の幸いな待ち望みについて、パウロは、前に話しましたように述べたのです。即ち、いつまでもイエス様と一緒にいることです。20節です。

ピリピ人への手紙 3章20節、21節

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主と

しておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

イエス様によって完全に捕えられていることこそ、あらゆる力の秘訣です。イエス様によって捕えられた者だけが、目標を捕えるようになります。ですから、この3章12節に書いてあります。

ピリピ人への手紙 3章12節

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。

救われた目的とは、それなのです。あらゆる勝利は主に属する者を前進させるものです。すべて耐え忍んだ試練は、その兄弟姉妹の信仰を強くします。イエス様の助けを体験した者は、その喜びを増し加えられるのです。

ある神学校で、学生たちが一つのテーマ、即ち「全能なる神と悪魔」について論文を書くことになったのです。彼らにはただ4時間だけしか与えられていなかったのです。

その論文は、あらかじめ三つの部分に分けられるべきでした。即ち第一番目、全能なる主。第二番目、悪魔の存在と本質。第三番目、全能なる主と悪魔との関係、即ち悪の発生とそれが赦されていることの問題。この悪を主なる神が支配なさり、光の国によって闇の国が支配されることなどについて書くのが当然でした。

けれど、一人の学生は、主なる神の全能、主なる神の偉大さ、主の愛、主の知恵、主の真実、主の善、そしてあわれみなどについて夢中になって書いていたのです。突然終わりの時間がやってきました。彼はただ主のことについてだけ初めから終わりまで書き続けたのですが、それはすべて感謝と喜びに満ちたものでした。彼は、時間になった時に、「悪魔に時間なし」と書いて論文を出したのです。

先生がその学生に対していかなる評価を与えたのか、もちろん分かりません。しかし、私たちは、「悪魔に時間なし」というこの言葉から、多くのことを学びとることができるのではないのでしょうか。

私たちの心が、本当に主イエス様によって満たされているならば、悪や悪魔が入り込む余地は全くありません。その時の私たちの心は、いわばイエス様によって占領された地域のようなものです。私たちの心が上にあるものを思うなら、罪やこの世のものは全く力を失い、私たちは別の使命と目標を持つようになります。私たちの時間は、主のものとなります。

イエス様を喜ぶことは、私たちの周囲に張り巡らされた要塞のようなものとなります。イエス様が私たちを捕えてくださればくださるほど、罪はその力を失います。私たちは、イエス様のための時間を多く持てば持つほど、私たちの敵である悪魔のための時間は、ますます少なくなります。「悪魔に時間なし」。

ドイツのケルンにある画廊に、大きな油絵があります。それは、旧約聖書に出てくる士師記のサムソンを描いたものでした。それを見ると、サムソンは細い紐で縛られ、小さな子どもがその紐を持って、巨人サムソンを導いています。そのサムソンの髪の毛は断ち切られて、大地に落ちています。この髪の毛は、サムソン自身がすべての生活を主に捧げたことの証明となるものでした。けれど、サムソンは罪によって霊的な力は失ってしまっていたのです。いかに小さな罪があっても、罪を犯した者は悪魔に縛られてしまうのです。

ただ主にすべてを捧げ尽くすことが、本当の力の秘訣です。ただイエス様との霊的な交わりだけが、勝利の生活に導くのです。歴代誌下の16章は、何度も、何度も引用された箇所ですが、

歴代誌・第二 16章9節前半

「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がお自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。」

勝利を得たいと思う兄弟姉妹は、すべてを主に明け渡さなければなりません。このように全く主イエス様に委ねたキリスト者だけが、本当に恵まれた、祝福された者です。

競走者の真の生涯は、焦点が二つある楕円、即ち、自分自身とキリストの生活ではなく、イエス様というただ一つの中心しかない円のようなものです。

もう一度、読んで終わります。コロサイ書1章18節です。

コロサイ人への手紙 1章18節

また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。

了